

ウルリヒ・ベック 『危険社会』

書誌データ

ウルリヒ・ベック著 / 東廉、伊藤美登里訳, 1998, 『危険社会 - 新しい近代への道』
= Ulrich Beck, 1986, RISKOGESSELLSHAFT: Auf dem Weg in eine andere Moderne

本書の概要

チェルノブイリ原発事故の発生を受け、その無差別的な破壊力を目の当たりにしたベックが、致命的な環境破壊を増殖させる社会のメカニズムを分析し、現代社会を、富の分配が重要な課題であった産業社会の段階を超えて、危険の分配が重要な課題となった「リスク社会（邦訳では危険社会）」であると論じた。社会学の専門書であるにも関わらず、5年間で6万部という異例の大ヒット作となった。

チェルノブイリ原発事故

1986年4月26日、ウクライナのキエフ州北部、プリピャチ市のチェルノブイリ原発で発生した原子炉の爆発・火災事故。発電所職員と消防士のみでも死者31人、負傷者203人。周辺30km以内の13万人以上が避難。事故後ヨーロッパ諸国で高度の放射能汚染が観測されたほか、日本を含む北半球の広い地域でも放射能が検出された。周辺地域では現在でも放射能は残っており、甲状腺癌や白血病の原因ともなっている。

リスク社会の定義と前提

「近代が発展するにつれ富の社会的生産と平行して危険が社会的に生産されるようになる。貧困社会においては富の分配問題とそれをめぐる争いが存在した。危険社会ではこれに加えて次のような問題とそれをめぐる争いが発生する。つまり科学技術が危険を造り出してしまうという危険の生産の問題、そのような危険に該当するのは何かという危険の定義の問題、そしてこの危険がどのように分配されているかという危険の分配の問題である。」 p.23

・貧困社会（産業社会）からリスク社会への転換の前提（p.23）

人類の技術生産力と社会福祉国家的な保障と法則とがある水準に到達し、物質的貧困が客観的に軽減され、社会から追放されること

貧困は問題ではあるが、その程度はかつてほど深刻ではなくなった状態では、社会の主要な課題はリスクへと移行する。

近代化の過程において生産力が指数的に増大するとともに、危険と人間に対する脅威の潜在的 가능성이、今までになかったようなスケールで顕在化すること

チェルノブイリ事故を破局へと導いたのは、人間的なミス、想像を絶する破壊力にかえてしまう技術の革新だった。そのような技術力に依存している社会にあっては、リスクにさらされるかもしれないという潜在的な可能性のなかで常に生きていかなければな

らない。

ゆえに・・・

「危険社会の基礎となり、社会を動かしている規範的な対立概念は、安全性である。危険社会には「不平等」社会の価値体系に代わって、「不安」社会の価値体系が現れる。」 p.75

危険社会を進展させるエネルギーは「不安」

リスクおよびリスク社会の特徴

1．近代化に伴うものとしてのリスク - 産業社会の進展とともに先鋭化

「二十世紀末近くになって、自然は征服され、誤った利用がなされた。そして、それに伴い、人間の外側の現象であった自然が内側の現象へと変化し、昔から存在していた自然現象が造られた現象へと変化したのである。・・・その結果、自然は産業システムの内部に組み込まれた。・・・産業システムの内部に組み込まれた第二の自然がもたらす脅威に対しては、われわれはほとんど無防備である。・・・危険は、風や水と共に移動し、あらゆる物とあらゆる人の中に潜り込む。そして危険は生命にもっとも不可欠な物の中にも潜んでいる。例えば、呼吸のための空気、食料、衣服と住居の中に。」 p.4-5

「当時（19世紀）の危険は、衛生技術の不備に帰することができたが、今日の危険は、過剰な産業生産にその原因をもっている。・・・これらは近代化に伴う危険なのである。近代化に伴う危険は産業化のメカニズムによっていやおうなしに一括してもたらされる結果であり、産業化の進展とともに構造的に先鋭化する。 p.27-28

・・・つまり、リスクは近代社会においてもたらされた、新しいタイプの危険である。

2．宿命としてのリスク - 何人も逃れること能わず

「ここでは危険は宿命である。それからはどんなに努力してみても逃れる術は残されていない。」 p.2

「新しい陸地や大陸を発見しようと出かけていった者は、「危険」を甘受しなければならなかった。だが、これは個人的な危険であり、核分裂や核廃棄物の貯蔵によって発生する危険のように、人類全体に対する包括的な危険状況ではない。」 p.26

「ありとあらゆるものの中に潜むことができる危険は、生きていく上で必要な空気、食物、衣服、住まいの調度品などとともに厳しく監視されている危険の保護区内に入り込んでしまう。この点に、危険と社会的な富との相違が見られる。富は魅力的であるが、忌み嫌って所有しないことも可能である。・・・これに対して、危険や被害は知らない間にそこかしこに忍びこんで、個人の自由な(!)決定に阻まれることもない。この意味で、危険が今までとは異なった形で強制的に割り当てられることとなったのであり、いわば一種の「文明社会の宿命としての危険状況」が生じている。」 p.59

リスクは、あらゆる人たちに同様に降りかかるため、階級を超える。

「危険は、それが及ぶ範囲内で平等に作用し、その影響を受ける人びとを平等化する。危険のもつ新しいタイプの政治的な力は、まさにここにある。この意味では危険社会は決して階級社会などではなく、その危険状況を階級の状況として捉えることはできない。・・・地球的規模で危険が拡大しているため、危険にかかわることは普遍性を獲得し、個別の問題ではなくなっている。」 p.51-52

しかしだからといって、階級がリスクの分配状況と何の関係もないということではない。

「世界は等しく危険状況に曝される。しかし、それだからといって、危険に巻き込まれた場合、その内部で新たな社会的不平等が生まれていることを隠すことはできない。とりわけ国際的な規模で階級状況と危険状況が重なり合うところに、不平等が見られる。・・・極度の貧困と極度の危険との間には構造的な「引力」が働いているのである。」 p.60

「階級社会と危険社会の間には重なり合う点が多い。これまでの危険の分配が示しているように、危険は階級という図式に依存している。これは富の場合と同様である。ただし、富の問題が上方への集中であるのに対して、危険の場合は下方へ集中している。その限りにおいて、危険は階級社会を解体させずに強化させているのである。下層階級では、生活が困窮しているだけでなく、その安全性が脅かされている。・・・これに対し、収入、権力、教育のある豊かな者は、安全性と危険からの自由を金で買うことができる。」 p.48-49

・・・つまり、リスクによってもたらされる被害は、その性質上、階級を超えてすべての人たちに及ぼされ得るが、実際に被害をうける可能性や、その被害の程度においては、階級による不平等が依然として存在している。

ただし、貧しい地域で発生したリスクは、やがて豊かな地域にももたらされる。

「進行しつつある危険の分配のパターンは、地球的規模における危険の拡大化に内在した現象であるが、危険の拡大化そのものとは明らかに異なった現象である。・・・危険はそれが拡大する過程で社会的なブーメラン効果を発生させる。つまり、危険を前にして、富める者も力を持つ者も安全ではない。」 p.52

「危険は高まり、拡大し、そのあげくの結果が、食物連鎖を通じて回り巡って、豊かな工業諸国に跳ね返って来るのである。」 p.62

それゆえ、リスク社会においては、世界社会というカテゴリーでしか問題への対処ができない。

「危険社会では客観的にみて「危険が共有されている」ので、最終的には世界社会というカテゴリーでしか危険状況に対処しえない。」 p.72

3. リスクの不可視・不可知性 - リスクを認知する知の重要性

「(19世紀の危険は) 感覚的に知覚することができた。それと異なり今日の文明生活の危険は、通常、知覚できるものでない。むしろ科学や物理学の記号の形でしか認識されないのである(例えば、食品に含まれる有害物質、原子力による脅威)。」 p.27

「危険を危険として「視覚化」し認識するためには、理論、実験、測定器具などの科学的な「知覚器官」が必要である。」 p.35-36

だからリスクを認知することは、政治性を帯びる

「この危険は、最初は危険をめぐる知識の中にだけあらわれる。危険は知識の中で加工され、誇張されたり過小評価されたりすることがある。そしてその限りにおいては、社会が自由に定義づけることができる。このため危険を定義する手段と定義づける権限をもつ地位は、社会的にも政治的にも重要になる。」 p.29

「危険状況においては、意識が存在を決定する(=危険があると意識することによって危険が存在する)。知識は新たな政治的意味を獲得する。」 p.30

それゆえに、リスクを社会的、政治的に定義しようとする動き = リスクの社会的側面に注意しなければならない。

「危険を確定するということは、倫理が、哲学や文化や政治とともに - 近代化の中心である - 経済や自然科学や技術の分野で再び注目されるという事態を意味する。・・・危険に当たるかどうかという定義において合理性という概念が用いられるが、それを科学が独占していた状況は崩壊したのである。」 p.38-39

「住民の大半や原発反対者が問題にするのは、大災害をもたらすかもしれない核エネルギーの潜在能力そのものである。目下事故の確率が極めて低いと考えられていても、一つの事故がすなわち破壊を意味すると考えられる場合には、その危険性は高すぎる。さらに、科学者が研究の対象としなかった危険の性質が大衆にとっては問題なのである。・・・危険をめぐる討論のなかで浮き彫りにされるのは、文明に伴う危険に潜在する、科学的な合理性と社会的な合理性との対立なのである。そこでは、しばしば話が相互に噛み合わず、質問が出されても質問を受ける側がそれに全く答えなかったりする。また、不安のもととなっている問題の本質を突かない的外れな回答が出されたりすることもある。」 p.40-41

また、リスクは不可視であるがゆえに、発展の名の下で隠蔽される

「どうせ知覚し得ない危険であるので、それを無視することは、具体的な貧困をなくするという大義名分の下で、つねに正当化される。第三世界ではしばしばそのようにして危険が正当化されてき

た。・・・貧困が明白に存在することによって、危険を知覚することは難しくなっている。とはいえ、貧困によって抑えられているのは危険を知覚することである。それによって危険の現実性や影響が貧困によって少なくなるわけではない。貧困によって存在を否定された危険は、ことのほか勢いを得て急速に成長する。」 p.57

4．国境を越えるリスク - 国内ではおさまらないほどの破壊力

「豊かな森林を有する諸国（ノルウェーやスウェーデンなど）は有害物質を大量に発生する工業をほとんど有していない。それにもかかわらず、他の高度に発達した工業諸国の有害物質のツケを、森林の枯死や植物と動物の絶滅によって支払わねばならない。」 p.27

・・・チェルノブイリでは日本にまで放射線が及んだ

それゆえに、

「危険社会では客観的にみて「危険が共有されている」ので、最終的には世界社会というカテゴリーでしか危険状況に対処しえない。」 p.72

5．未来被拘束性 - 将来の可能な出来事としての危険が行動を促す

「危険においては、未来が重要な要素である。・・・元来、危険は予測とかかかっている。つまり、未だ生じてはいないが既に脅威の対象となっている諸々の破壊とかかかっているのである。・・・危険社会において、過去は現在に対する決定力を失う。決定権を持つのは未来である。・・・今日われわれは、明日の問題である危険を予防し、和らげ、対策を考えるために行動を起こす。さもなければ何もしいかのどちらかである。」 p.46-47

6．再帰的 reflective な近代 - 常に自己を問い直す姿勢

「産業社会においては、富の生産の「論理」が危険の生産の「論理」を圧するのに対し、危険社会ではこの関係が逆転すると考えられる。近代化の過程が自己内省的段階に至ることにより、生産力が悪と見なされるようになったのである。」 p.14

「もはや、自然の利用や伝統的束縛からの人間の解放が問題なのではない。・・・技術と経済の発展そのものの帰結も、重要な問題となるのである。近代化の過程はその課題と問題に対して「自己内省的」となる。諸技術を（自然や社会や人格の領域において）いかにして発展させ応用させていくかという問題に代わって新たな問題が生じる。それは重要な領域でテクノロジーが危険を生み出す、あるいは生み出す可能性があるが、その危険を政治的また科学的にどのように「処理」するかという問題である。すなわち危険をどのように管理、暴露、包容、回避、隠蔽するかという問題である。」 p.24-25

生産力の拡大とともに近代化は進展してきたのだが、その結果として環境が破壊され、

チェルノブイリのような破滅的な事故が発生してしまった。「科学や経済の発展 = 幸せな社会」という「大きな物語」がもはや終わってしまったことに否応なしに気づかされた人びとは、科学や経済に対する反省をせまると同時に、「大きな物語」にしたがって行動をしてきた自己への反省をせまるようになった。

まとめ

ベックは、これまで経済的な財にばかり焦点を当ててきた社会科学の姿勢に疑問を覚え、これからはリスクの存在が社会を形成するための重要なカギとなることを本書で示した。その背景には、財の獲得のためになされた自然の過剰な利用が、環境の破壊へとつながり、結果的に自分たちの首を絞めるようになったこと、そしてチェルノブイリ原発事故に代表されるように、科学技術の発達、人為的なミスが破滅的な力へと転換することに人類が気づいたことがある。そして、そのようにして作りだされたリスクに対しては、その影響力が地球規模におよぶため、人類が等しく不安を覚え、それゆえにリスクをどこにもっていかというリスクの分配が、財の分配よりも重要性を帯びてきたのだと指摘する。

リスクをキーワードに環境問題をみていけば、環境負荷というリスクが国内においては地方に、国際的には途上国におしつけられている理由の一端がみえてくる。いうなれば、環境問題は、リスク社会の到来を告げる指標だったのである。

おまけ

東の街に雨が降る
西の街にも雨が降る
北の海にも雨が降る
南の島にも雨が降る
チェルノブイリには行きたくねえ
あの娘を抱きしめていたい
どこに行っても同じことなのか？

THE BLUE HEARTS チェルノブイリ